
初の年下

月見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初の年下

【コード】

N8945V

【作者名】

月見

【あらすじ】

まさか、タイプでもない年下と付き合つとは思ってもみなかった、というのが趣旨のお話です？

出会いと迷い（前書き）

書くの勇気が必要だったです…？

小説書くなんて中学生以来だったし？

絶対稚拙な文で、読むの嫌になるかもしれないんですが、最終話までお付き合いいただけたら光栄です？

出会いと迷い

うちの出会いは突然だった。

「中スポ？

持ってきてみましょうか？」

この言葉からうちは、

自分が通っている学校の他学科の後輩に、

今までなかった興味が一気に注がれた。

その後輩Nは新聞奨学生という制度の下で学校に通っていて、

プロ野球観戦のチケットもあるらしく、

クラスの仔が（作者）はナゴヤドームに観に行くんだよとNに話したところ、

チケットを出会った次の次の日に（出会った日が土曜だったため）中スポと一緒にもらえる事になった。

その時になぜかアドレス交換もする事になり、
うちはNに後でメールを送るという条件でアドレスを教えてもらっ
た。

野球チケットの事で教えてもらったんだけど、
正直そんなの学校で話し合えばいいのと思っていて、
なぜ教えてもらう必要があるのか全くわからなかった。

それでも男友達が少ないうちにとって、
自分の携帯のアドレス帳に男子が1人でも増える事は悪い気はしな
かった。

うちは学校帰りに早速Nにメールした。

が、
返事は一向に返ってこず、
返ってきたのは夜だった。

その日は、
同じ学校に通っているという事もあり
学校の話題で盛り上がっていた。

次の日

日曜日だったという事もあり、
特に用事のない毎週土日のようにのんびりしていたうちの携帯に、
1通のメールが来ていた。

送り主はNだった。

内容はもちろん野球チケットの事。

メールしているうちにNがうちに電話しようと言ってきた。

男の人と話す事自体が苦手なうちはどうしようかすごく迷った。
だから友達に相談したら、

（作者）がしたいならすればいいんじゃない？

と言われたから、

別に断る理由もないからという事もあり電話する事にした。

自分の携帯番号をNに送った直後に電話が掛かってきた。

正直掛かってきた時は出ようか出まいか迷った。

うち人見知りするし無口な方だし…。

でもせっかく掛けてくれたしと思ったたら出ないのは悪いし出る事に
した。

男の人と電話するのは中3以来だったからすごく緊張した。

でもその緊張はすぐに解けた。

Nと電話していて、

今まで生きてきた中ですごく楽しかったから。

Nは甲子園が好きで、

語り出したら止まらなかった。

うちはどっちかと言うとプロ野球派だから、

詳しくなかったし話に全然ついていけなかったけど、

でもあまりに楽しそうに話す声はなぜか嫌いじゃなかった。

甲子園について語っている時に、

Nがいきなりこんな事を言ってきた。

「一緒に甲子園まで観に行く？」

それを聞いた時、
正直「は？」

と思った。

うちはもちろん断った。
理由は敵地だから。

甲子園は阪神のホーム球場だし、
うちは中日ファンだからね…。

Nのお誘いは甲子園だけじゃなかった。

ほかにはお祭り。

もちろんそれも断った。

誘われて悪い気はしなかったが、
でも他の女の子にもそうやって誘いまくってるんだろっと思って思っ
たら、
到底行く気にはなれなかった。

でもいろんなイベントにうちを誘う理由を知るのは、
そう遠くない未来だった。

うちはNと知り合ってから、
登下校を一緒にするようになった。

ただしふたりではない。

下校だけ友達も含め、
3人で。

登校は友達が県外から通っているし遠い事もあったでしょうがないけど、
男子とふたりだけで、
なんて、
うちからしたら一種の拷問みたいなものだった。

そんなこんなを繰り返していたある平日の夜。

どれだけ断っても断っても懲りずにNはうちをイベントに誘ってきた。

12

そんなNに、

うちはあるひとつの疑問を持ってそれを聞いてみた。

「どいつかうちの誘いの？」と。

返事は積極的だなあみたいな事だった気がする。

うちは冗談半分で、

「変なところに積極的だから笑」

と言った。

その返事に対する返事は、
今電話してもいいか、

だった。

正直今したくないと思ったうちは後でいいかと言った。

するとその返事は意外なものだった。

「もし俺が（作者）と付き合いたいって言ったらどうする？」

Nには悪いけど、
男に免疫のないうちはこの文を見た時、
一気に体調が悪くなった。

うちは電話は正直いろんな意味で無理だと思い、
言いたい事があるならメールにしてと言った。

その数分後に、
Nからメールが来た。

「本気で付き合いたい。」

ああ、やっぱり…。

告白の文はこの一文だけではなかったが、
こつこつのが来るんだろつなつていつのは途中から大体予想はついでいた。

うちはしばらく返事はしなかった。

悩んでいるうちに、
うちはいつの間にか寝ていた。

そこから返事をしたのが告白メールが来てから大体小一時間後。

「付き合おうか。」

それがうちの下した決断だった。

付き合ってから相変わらず男に免疫ゼロのうちは、
一緒に登校しても放課中に会っても顔を合わす事すらなかった。

というか、

付き合う前から放課中に会う事はしてたけど、
校内で会う度うちがひたすら走って逃げていた。

だから会話もまともにできなかった。

唯一の会話手段は電話だった。

多分、
顔合わせず声だけだから。

ある日、
Nがメールでうちと手繋ぎたいと言ってきた。

そう言われて嬉しかったけど、
でもできる自信がなかった。

そもそも異性に触れる機会がゼロといってもいいほどなかったうち
には、
ね。

次の日の下校中。

Nと一緒に帰っている時、
うちの頭の中には昨日メールで言われた
“手を繋ぐ”
という事しかなかった。

それをなかなか口にしなかったうちにNはしびれを切らした。

頭の中に“言われた事”が残っているだけでもドキドキしていたの
に言った本人から言われると、
余計なにもできなかつた。

学校の最寄り駅は歩いて5分。

その駅がもうすぐそこ。

今日繋がなきゃいつ繋ぐ!!

そう思ったうちは、
意を決して繋ぐ事にした。

あれ…？

恋人同士なら触れただけで普通ドキドキくらいはするだろう。

でもこの時わかった。

うちはまだそんなにNの事好きじゃなかったんだ。
と。

じゃあなんで付き合っているのか。

そんな事聞かれてもわからない。

でもそんなうちに、
Nを少しでも好きになるきっかけが来る事は、
この時のうちは知るよしもなかった。

ある時うちはNの家（というか寮）に遊びに行きたくなつた。

寮は女子入寮禁止らしいけど、
行きたいと言って遊びに行った。

寮の部屋は思ったより狭かった。

電話で聞いたからわかっていただけ暑かった。

1つ同じ屋根の下…緊張していた。

なにも起こらないわけがない。

といつか引き金を引いたのは、

うち。

あんな事言っただから…。

寮に来てから数時間が経った頃。

眠そうなうちを見かねたNが、

「眠いなら寝ていいよ。」

なんもしないから。」

と言ってくれた。

最初は迷ったが、

とりあえずうつ伏せに寝転がる事にした。

なんもしない。

大切にされてるんだろうな…。

あの時のうちはなに考えてたんだろう。

うつ伏せになりながら携帯をいじりこつ書いてNに見せた。

『なんかしたいならすればいいじゃん。
ただし限度つてもんがあるけど。』

それを見せられてなにもないわけがない。

Nの右腕がうちの背中に回ってきてキスしたいとせがんでくる。

嫌だともちゃくちゃ抵抗したが相手は男。

いつまでも勝てるわけがない。

された瞬間変な気分になった。

しかも手は服の中に侵入。

するとNが、
うちの一番恐れていた事を言ってきた。

「挿れたいなあ。」

その言葉を聞いた時、
終わったと思った。

あんな事言わなきゃよかったと思った。

挿れないでと言ってもNは
「なんで？」
の一点張り。

それから何回恐れていた言葉を聞いただろう。

その言葉を聞いた時からうちには別れたいという感情が少しずつ湧いてきた。

誘ったのはうちのなに。

勝手だ。

Nが自分のズボンのベルトに手をかけた時は本当にびっくりした。

だからそれを見た時は泣きそうになった。

でもその後ひたすら嫌がったらやめてくれた。

どうしてそんなに嫌がるのか聞かれた。

理由を言っているうちに、
泣いた。

とりあえず脱いだものを履いたらと言われ履こうとしたが、
滅多にこんな事はないうちは恥ずかしくなって履かせてもらった。

介護士みたいだと言われめちゃくちゃ笑った。

その時は。

その後は深刻な話になると誰も思っていなかっただろう。

急に精神的にきつくなっただちは、
独りにしてほしいと言ってNに部屋から出てってもらった。

うちはこの時いろんな事で頭がぐちゃぐちゃだった。

でも考えている時にいつの間にか寝ていた。

起きたのはNが入っていいかノックをした時だった。

その時はまだダメだったので、
もう少し待ってもらった後に入ってもらった。

その後はたくさん深刻な話をした。

「俺の事好き？」

「幸せ？」

「別れたいかと思う？」

とか。

好きかどうかも幸せかもわからなかった。

正直少し別れたいとも思った。

正直男の人無理という話もした。

でもNはいつ言ってくれた。

「お前が嫌がる事はしたくない。

男が信じられないなら俺が信じさせてみせる。」

とか、

「お互いの事知るには最低3ヶ月は要る。」

と。

この時はその言っている事が本当かどうかなんてわからなかった。

人を信じるには必ず時間が要る。

でもこの短時間の中で、
わかった事がひとつだけあった。

“男は顔じゃない”

と。

「自分からこんな事言うのもなんだけど、
うちこの重い空気ダメなんだよね。」

重い空気の中、
口を開いたのはうちだった。

「急に変わるのとはどうかと思うから、
徐々にね。」

それを聞いたNは、
その重い空気を徐々に変えていってくれた。

その変わった空気の中、
なにをして時間を過ごしていたかは正直覚えていない。

出会いと迷い（後書き）

さすがに、とうか19歳の脳ミソなのに、と云うべきか…つい1ヶ月ちよい前の出来事なのにも関わらず、抜けてるところが少なからずあります…？

次話からも恐らくそついう問題が発生するかと思いますが、懲りずに最後までよろしくお願ひします？

リスクと事件（前書き）

やっぱり19歳といえど、記憶力大した事ないんだなーと思いましたが…。

今回書かせていただいたお話は、付き合ってからまだ数日ぐらしか経ってない頃の事なのですが、すでに曖昧です…。申し訳ないです？

リスクと事件

『明日の英検の授業の間の放課、
そっちの教室まで会いに行つてほしい？』

英検の授業だけではないが、
Nとクラスが違ううちは、
校内で会う度に走つて逃げているにも関わらず、
そうメールで言った。

返事でも来てほしそうだったので行く事になった。

英検の授業の放課中

うちは約束通りNのいる教室に行つて、
なんの躊躇もなく扉を勢いよく開けた。

その途端、
すぐく帰りたくなつた。

Nがいたからではない。

教室に、
あまりにもたくさん生徒がいたからだ。

うちは、
何事もなかったかのような顔をして、
友達の元へ行って、
すぐにロビーに出、
友達と一緒に扉の窓口からNを見た。

驚いた。

英語嫌いそうなのに、
単語帳開いて熱心に勉強していたからだ。

一生懸命勉強していた理由は、
紛れもなく、
20点以上取れなかったら1週間手繋ぐの禁止ね、
とうちが言ったからだ。

ま、20点以上なんてそう簡単に取れるもんでもないでしょ。

特に嫌いな人には…。

チャイムが鳴って授業が始まったにも関わらず、
うちは教卓の目の前の席で友達とメールしていた。

そのメールで、
うちは信じられない事実を知ってしまった。

『点数24だつて。』

え？
嘘でしょ？

Nには失礼だけど、
本気でそう思った。

その事実を知ってから
の授業中はかなり放心状態だった。

その日の帰り。

うちはNと一緒に帰るため、
1階のロビーでNを待っていた。

でも何分経っても現れる様子がないNに

『早く来ないと先に帰るよ。』

と本気半分冗談半分で言った。

返事はすぐに来た。

そのメールを見て、
少しムカツと来たのと同時に寂しさがあった。

だからうちは、
先に帰って謝ってるNに対して、
怒っているふうなメールを送った。

でもこの時の感情は冗談に過ぎない。

だって彼氏といえど、
後輩いじり楽しいんだもん

結局この日は仕方無く途中まで友達と帰って、
途中から独りで帰った。

ちなみに、
もし20点以上取れたらの条件はといえれば…。

ただ「おめでとう」と言うだけ笑

これは友達と一緒に考えた案笑

リスクが違い過ぎる笑

次の日の下校中、

うちは昨日の賭けについてNに言われた。

「お前、

1週間手繋げないなんて我慢できるのかよ。」

「できるよー。」

「本気かなあ。」

本当だよ。

すごく好きだったりしたら、

一瞬足りとも触れないなんて耐えられないだろうけど、
でもまだそんなに好きじゃないし。

耐えられる理由聞かれなくて良かった。

もし聞かれたりしたら、
なんて言おうか相当困ったと思う。

だってこういう事で嘘つくの苦手だし、
第一本音言ったらその後どうなるか大体予想つくし…。

それにあの仔、
うちの心見透かすの巧いし…。

そんなうちに、

ある日、

事件は起きた。

「どっしょ…。」

家に入るのが怖い…。」

時刻は0時過ぎ。

うちが今まさにいる場所は自宅近く。

近くにいる人は、

N。

そう、

親に彼氏ができた事を知らせていない状況で、
絶対やってはいけない事をしてしまったのだ。

事の成り行きはといえば、

寮付近のカラオケに行きました。

歌っていました。

ふと携帯で時間を見ました。

23時回っていました。

そんなこんながあつて、
家に着いたのが0時過ぎ。

もちろん親からは無数のメール。

そのメールを読んでいるうちに、
ますます家に入りづらくなるうち。

だからってあまり迷っている時間はない。

Nだつて、

絶対乗らなくてはならない最終電車があるから。

「どじすんの？」

Nにそう聞かれ、
数分迷ったうちは決心した。

「家には帰らない。」

そう言ってうちは、
初めて彼氏の家に泊まりに行った。

うちは平常心を保つ事もできず、
気分が悪くなる中寮に向かうため地下鉄に乗っていた。

「大丈夫？」

うちを気遣ってくれるNに対して、
絶対大丈夫じゃなさそうな態勢で
「大丈夫だよ。」

と言う。

地下鉄を降りて、
元々寮までの道のりは遠い方だったが、
その時ばかりはいつも以上に遠く感じた。

うちの体調は相変わらず下向き……。

今日泊まれるとしても、
明日学校だよ？

いちいち人の服装なんて誰も覚えてないだろうけど、

でもさすがに同じ格好はまずいでしょ…。

そうは思ったものの、

翌朝Nは自分の服を貸してくれた。

とは言っても、

貸してくれたのはTシャツと上着だけ。

ズボンは仕方無い。

サイズの問題あるし。

でもこの時唯一の助けが、
うちが普段の格好がボーイッシュだって事。

そうじゃなくて、
もしスカート履くような女の子だったら絶対怪しまれる。

だがそんな事も思わせてくれなかった。

クラスの子から、

「それ（作者）の服じゃないよね？」

と言われる。

無理もないか…。

上着もTシャツも、
全部サイズ違うし。

その日の、
とある放課中。

うちはある時担任に呼び出された。

用件は、
学校に親から電話が掛かってきた、
との事。

やられた…。

そう思った。

うちは親に電話した。

泣いていた。

そこまで心配させてたんだと痛感した。

そう思ったら泣いた。

何度も謝った。

放課中に電話したから、
事情を話すには時間が足らなすぎた。

だから再度、
昼放課に電話する事にした。

この時決心した。

全てを打ち明けよう。

その前にうちは担任に心配を掛けた事を謝りに行った。

そこで担任に言われたのは、

「大丈夫か？」

早退するのか？」

だった。

親は担任には事情を言っていなかったようだ。

良かった、

と心底思った。

問題の昼放課、

うちはNを呼び出し、

約束通り親に電話した。

さすがに2度目の会話からか、

親の態度はあっけらかんとしているようだった。

そして事の成り行きを、

どこで寝泊まりしたかなどを全て話した。

全て話し終えた後、
うちはNに電話が変わるように言った。

理由は、
自分の1人娘がどんな男と付き合っているのか、
今できるせめてもの事をするために。

最終は拒否っていたが、
うちはどうにか言って電話に出させた。

2人の会話はあまり聞いていなかったが、
Nは
「はい。」
「
や
「すみません。」
しか言っていない。

あまり質問攻めとかにするなどは言ったものの、
こればかりは仕方無いかとは思った。

電話を終え、

親はうちの交際を反対しているわけでもないし、
とりあえず悪い方向に話が進んでいないだろうという事に、
うちは安心した。

リスクと事件（後書き）

今思えば、こんな事もあったんだなーと懐かしいと思う事ができます。

相変わらず男に免疫ゼロで、ダメな所が多い私ですが、どうぞよろしくお願いします？

現状と対面

「ロンダートできたら結婚してくれる？」

いきなり放たれたその言葉を聞いた時、

は？

なに考えてんの？

と思う他なかった。

うちはロンダートというものをよく知らなかったし、
そもそも結婚する気も微塵もなかった。うちは返事もせず、

「悪いけどうち、

誰と付き合おうが結婚する気ないよ。」

とだけ素っ気なく言った。

結婚するしない以前にロンダートはさせなかった。

だって、

場所は広い公園の一角のコンクリの上。

失敗でもしたら腰強打。

笑いごっこじゃない。

だからさせなかった。

てか免疫のないうちが結婚とか…

マジないわー！。

そもそも結納、

めんどくね？笑

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

そんなNに、
ある一大事件が起きた。

うちの親が、
Nも含め3人で食事したいと言い出したのだ。

ある条件付きで。

その旨をNに言おうか言うまいか迷っていたが、
うちは内心楽しんでいた。

結局言う事にしたうちは、
それを聞いたNの反応を見て、
ますます楽しくなった。

その、
これから起こる出来事の前に、
うちがまさかな体験をする事を知らなかったこの時のうちは、まだ
平和だったと思う。

蝉がミンミンうるさく鳴く頃に、
うちの通う学校は夏休みに入った。

Nとは夏休みに入ったら、
県外に海の日の日帰り旅行に行く約束をしていた。

うちはその日を楽しみにしていたが、
Nはどこか少し浮かなそう。

理由はひとつしかない。

さっき書いた、
“ある条件”に
しっかりと結びついている。

うちの親が3人で食事したいと言った時、
いつにするかという話はもちろん出た。

Nには配達あるし平日無理だし、
それを踏まえた上で、
食事を旅行の前日にした。

前日にしたのは、
ちゃんと理由がある。

それは、
旅行に行きたいのなら、
前日に3人で食事をしましょう。

それプラス、
前にNはうちの親と1回電話で話した事がある。

その電話で話した相手と直に話す事になったらのNの反応がめっちゃ
くっちゃ楽しみだったのだ。

そう、
いわずもがな、
旅行の前日に食事、
そして旅行に行きたいなら食事をする事を絶対条件にしたのは、

うち。

そんなある日、
うちはNからとんでもない事を言われた。

「日曜日豊橋行くけど一緒に来る？」

「はあ？」

ただ単に行くだけではない。

N曰く、

母親に会いに行くらしいのだ。

しかも日曜日…

日曜日と言えば、
旅行の前日。

いや、
今はそんな事どうだっていい。

なにを隠そう、
Nがうちの親と対面する日。

そう、
まさかのNの前になんかNの母親に対面する事になってしまったの
だ。

日曜日に行きする事になってからのうちの頭の中はすでにパニック状態だった。

上乗せでとにかく人に気に入られる方法を誰でもいいから教えてもらいたくてしょうがなかった。

望んでいてもそうでなくても、時は嫌でも流れるもので、とうとう日曜日が来た。

「いやーだー！！
帰るうー！！」

人に会うのに手ぶらじゃ失礼だと思い手土産を買ったまではよかったものの、
いざ豊橋に着くと、
うちはその台詞しか発していなかった気がする。

早く行くぞとNに手を引かれ促されたうちの目に飛び込んできたものは、
1台の黒い車。

「おつた。」

それを聞いた後のうちの一言。

「じゃ、

うち帰るから!」

そう言い残して帰ろうとしたが、

そういう訳にも行かず、

再度Nに手を引かれた。

その後はひたすらパニックだった。

Nは自分の母親だから平然としていられるだろうけど、
ましてやお見合いでもないのに人見知りするうちはカッチコッチだ
った。

Nがうちの事を今付き合ってる彼女と紹介してくれたのは内心嬉しかったけど、

え？

うちその後なに言えばいいの？

と普段使っていない頭の中を整理するのに必死なうちが発した言葉がなんだったかと言えば、

全く以て覚えていない。

少しの間その場に立ち尽くしているうちに助け船を出してくれたのはNだった。

豊橋行きの電車に乗る前にうちが手土産を買っている間に、

Nも自分の家族にお土産を買っていたらしく、

それを渡していた流れでうちも自分の買ったものを渡したのだ。

Nにもさり気なく助けられ、

無事に？うちとNの母親との対面は終了した。

単に性格が悪いのかドSなだけなのか、
うちが直後に思った事は、

次はこの仔の番かー

だった。

だが食事をする約束の時間は18時と決まっていたので、
しかもまだ今は昼時くらい。

時間があり過ぎて困っていたのでとりあえず漫喫に入る事にした。

時間が経つので、案外早いものだ。たまに忘れがちなのが怖いところだ。

気が付けば17時を回っていた気がする。

うちは特になんの焦りも感じていなかったが、Nはそうでもない様子。

今いる場所から集合場所のデニーズまでは距離があったし、明らかに間に合わないので親にメールをした。

うちの親は約束の時間に多少遅れるくらいでは特に厳しくなかったが、

この時のうちは面白がってNに、

「うちの親時間に厳しいから。」

と脅しをかけていた。

人って焦ると些細な事でもミスするんだなーと思ったのがまさにこの時。

どこに出掛けるにしても、

目的地に行き着くのにいろんなパターンを考えて慎重かつ迅速に行動しているNが珍しくミスをした。

そう、

バスを乗り間違えたのだ。

別に特にNだけのせいにする訳でもない。

だってうちは常に行き当たりばったりで行動する人だし、常に考えナシだから。

急いでバスから降りて地下鉄を乗り継いで、
集合場所に着いたのが確か約束の時間から10〜20分後くらいだ
った気がする。

デニーズの入り口付近とかでNが帰ると駄々をこね出した時は本当
に面白かった。

ほら行くよと手を引くうちは、
さっきと全く態度が違うとNに言われたのを今でも覚えている。

店内に入ると、
親はすでにソファーに座っていた。

うちは颯爽と遅れてごめんねと言って親の隣に座った。

Nはと言えば、
簡単に挨拶をし、
うちの座る向かい側のソファーに座った。

注文だけを済まし、
その時汗をかいていたうちは制汗剤を使ってスッキリするだけの事に3回もトイレに行った。

まあ、

親とNを2人きりにしたらどんな事になるのか、
想像するだけでは足りず、
実際に席を外してその場を楽しみたかったんだけどww

ただ楽しかったのもこの時までだった。

Nはいつの間にか、
うちの親を目の前にしてリラックスしている。

緊張が解けたのか、

はたまたNがO型だからか、
というかO型人類そのものがめちゃくちゃ羨ましく感じた。

いくら人見知りなうちでも、
自分の親にまでする訳もなく、
なんか適当な事を話して、
ご飯を食べ終え席をNの隣に移したうちにとって？一番出されたく
ない話題を親が話し出した。

その話とは、
うちがもう少し早く家に帰って来れないのかだった。

そう、
親に彼氏ができたと打ち明けるきっかけとなったあの事件以来、
うちはO時過ぎに家に帰るようになったのだ。

早く帰って来いとそう頼みたくなる気持ちもわからなくはなかった
が、

でも好きな人と少しでも長い時間一緒にいたいと思うのは、恋人がいる人なら誰でもわかるだろう。

その話題をきつかけに、
うちと親は口論になった。

と言っても、

9割方うちが一方的に言いまくっていただけだが。

Nに言い過ぎだと止められたにも関わらず、
うちはなにかたくさん言った気がする。

いろいろ言っただけで沈黙が流れ気まずくなり出した頃に、
うちらはデニーズを後にした。

たくさん言っただけで家に帰るのも気まずいだろうとの事で、
うちはその日家に帰らなかった事は言うまでもない。

日帰り旅行と記念日（前書き）

読者の皆様にお詫びをしなければならぬ事があります…。

前話の3人で食事をした時の話の事なんです、

食事後、

私はちゃんと家に帰りました？

ここに訂正とお詫びの言葉を添えたいと存じ上げます。

日帰り旅行と記念日

翌日、

いろいろ思いがけない事があったがこちらは約束通り日帰り旅行に行った。

行き先は馬籠。

そこには高校生の時からずっと行きたいと親と言っていた。

それがまさか、

彼氏と行く事になるとは思ってもみなかった。

行った季節は夏にも関わらず、
案外涼しくてホッとした。

風景もまさに下町って感じで、
うちの地元の田舎が都会かわからない中途半端な外観なんかよりず
っとよかった。

思ったより人がいた町並みを歩きながら、
なにかしら物を食べた。

うちは夏になると暑さに負けてばてて多くは食べ物喉を通らなくてそこまで食べなかったが、

Nはお焼きやら栗きんとんアイスというものを食べていた。

Nは栗を好まないらしいのだが、
馬籠の栗きんとんアイスは美味いと絶賛していたのを今でも覚えて
いる。

歩いているうちに座るところを見つけたうちらはそこに座って休憩
する事にした。

さすがというべきか、
そこから見た風景もいいものだった。

見えるものはといえば、
山や小さな家ばかりだったが（上から見たから小さく見えたんだよ
！！）、
それでも社会人に比べたら少ないであろうストレスからは解放され
ていた気がする。

うちは地理に疎いが、
Nはそうでもない。

N曰く、
馬籠の隣には妻籠（漢字合ってるかなあ）という町があるらしい。

これまた田舎ww

歩いて行けるらしいのだが、道のりは遠い。

6・7 kmか7・6 kmくらいだった記憶がある。

うちはそんな距離ものともせずに歩こうと言い一緒に歩いた。

が、甘かった。

足場悪いし、
なにより階段が…ノ（ハQハ）ノ

たった数百m歩いたところで泣く泣く引き返した。

引き返したのは距離の問題だけではなかった。

帰りの電車というが、
バスの終電の時間がかかり早かったのだ。

もう少し本数増やしとけよWW!!

まあそんなこんなで最後に帰る間際にお土産だけ買って、
初めての日帰り旅行は終わったわけですよ。 テンション違うWW

テンション戻します。

帰りのバス待ちの時にうちはふと思った事があった。

そういえば、

付き合ってもうすぐ1ヶ月経つんだなあと。

うちは今まで、

というか遠距離恋愛しかした事がなかったから（中3だけだよ！！）
記念日になにかすべきなのとかよくわからなかった。

だから唐突にNにもうすぐ訪れる記念日について聞いてみた。

するとなにか作ってほしいとの事。

作ってほしい。

この言葉に一気に火がついた。

作るって言ったらケーキだああと即座になんの根拠もなく思ったうちには、
初めてNと電話した時に、
確かチーズケーキが好きだと言っていた気がした事を覚えていたの
でそれを作る事にした。

不都合な事とはなんの前触れもなく訪れるものだ実感したのはまさにこの時だった。

ケーキを作ろうと思っていた矢先、
なんと親から電子レンジが壊れたとお達しが／＼(^ Q ^)＼

うっそーん W W W W

焼っけなーいやーん / (^Q^)(/ テンション戻ってる W W

だがしかーし!!

焼くだけがケーキではない。

冷やし固めるといふ戦法があるのだ (^) フフン

その方法に結び付くチーズケーキといえばレアチーズケーキ、
と知っていたうちは、

早速携帯でレシピを検索した。

さっすが携帯。

文明進化してるよねー。

レアチーズケーキ・レシピと検索しただけで結構な数のレシピが表示された。【b y m バれぴ】

うちは一番作りやすそうなもののに的を絞り、
ケーキ製作決行の日、
初のレアチーズケーキに挑んだ。

レシピを順に追って見ながら作っていくうちに、
とうとう冷やし固める作業に入ったうちは冷蔵庫に途中工程のものを
入れ、

3時間と少しそこで冷やし固まるのを待った。

3時間後

うちは恐る恐るケーキを型から外し、
全神経を集中させて箱に詰め全ての作業を完了させた。
イエイ +。

この時うちは、
後は何事もない事を祈り、
ただNに届けるだけだと安心しきっていた。

だが、
その考えも甘かった。

その後のケーキの成りがうちにとって多大なショックを与えるだろうという事を、
まだこの時のうちは知るよしもなかった。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「え？」

「マジで？」

「うちがそう驚くのも無理はなかった。」

Nが記念日前夜から次の日まで、
ラウンドワンでオールしようと言いだしたのだ。

別に一緒にいられるならと満更でもなかったが、
え？

こないだうちの親にもう少し早く帰れないのかって言われたばっか
りだよな？

と頭の上には疑問しかなかった。

まあうちも特に家に早く帰る気がなかったので、
記念日前夜、
Nと一緒にオールした。

この時にうちは感情的なのってつくづく損するなと思った。

Nには悪いが、
遊んでいる最中に不機嫌になってうちはあまり言葉を発しなくなっ
てしまった。

うちの異変に気付いたNは、
気を遣ってくれたのか、
休憩しようかと言ってくれた。

この時すでに日付も変わって、
記念日になっていた。

近くにあった椅子に腰掛けたうちのそばに来たNに触れられるのも
嫌だったうちは、
そういった行為をひたすら拒み続けた。

1ヶ月おめでとうと言ってくれたにも関わらず、
ノーリアクションで返してしまった。

この時のうちは、
正直帰りたいと思っていた反面、
せつかくの記念日なのに勝手な感情で機嫌悪くなって申し訳ない気がした。

帰りたいとも思っていたが、
こんな人がいるところじゃなくて、
せつかくの記念日なんだから2人きりになりたいと思っていたのは
言うまでもない。

少し言葉を発するほどいつの間にか機嫌が元に戻っていたうちは、
タダでラウンドワンにあったカラオケに入れる事を知り一緒に入っ
た。

タダだからという事もあるだろうけど、
ルームが少ないからか30分くらいしか時間がなかった。

少しだけ歌ったものあまりに曲目のなさにガツカリしたうちらは
歌う事をやめたどころか、
時間はいつの間にか30分近く経っていた。

もう歌う時間もないだろう頃に、
Nはうちをそっと抱き寄せ、

ちつき言ってくれた言葉をもう一度言ってくれた。

「一ヶ月おめでとう。」

素直に嬉しかったうちはその言葉に答えるように抱きついた。

時間もそろそろだという事で、
ルームを後にしたうちらが明け方までどういつぶつたして過して
いたかといえは、
申し訳ないが全く以て覚えていない。

本当だよ!!!

後、

ほんつとに申し訳ないm() () m--!!

途中スーパー行って買い物したりと、
うちにとってなかなかデンジャラスな事をしていたのだ。

そんな中最もうちがイラツと感じデンジャラスだと思った出来事。

買い物していてスーパーのカゴの中にケーキを入れといたのを、
レジに行った時に出さなかったうちが果たして悪いのか、
店員が会計すべき物ではないと見なすや、
見るからにデリケートであるう（まあ箱に入っているから中身はわか
かないんだけど）ケーキを台の上に容赦なくドンツ！と置いた
のだ。

その光景を見た時は頭の中のなにかがプチッと切れたなあ…。

はあ！？

なにしやがんだコイツー！

このケーキがうちらにとつてどれだけ大切なもんかわかってんのか
デメエー！！

と思った。

取り乱してしまいすみません m (((m

というかそう思う外なかった。

できる事ならその店員に向かってそう言いたかった。

…そんなハプニングに見舞われながらも、
うちはそのケーキを無事に？Nに届ける事ができた。

そのケーキと一緒に食べたのは数日後の事である。

そしてそれと同時に多大なショックを受けたのは、
ケーキの箱を開けた時であった。

見るに無惨な姿だった。

上からべっしゃんこな、
マジで見るに無惨…。

悲しすぎる現実を見た瞬間だった。

やっぱりケーキ事についてのショックというものはかなり大きい。

うちはレアチーズケーキというものを食べた事がなかったから、
そのべっしゃんに崩れたものを食べてみた。

が、
あんまりおいしい物だとは思わなかった。

Nは

「うまいよ。」

形はどうあれ笑

と言ってくれた。

形はどうあれ……ねえ……。

全くその通りだったから、
うちは苦笑いするしかなかった。

そしてこの時心に誓った。

冷やし固めるケーキは人にあげるべきではないと。

夏休みが後1ヶ月と少しで終わるといふ頃の8月の頭に、
うちは去年の夏からやっている夏休みと冬休みだけにある短期のバ
イトをした。

仕事内容も簡単だし、
職場の人もいい人ばかりだったから、
うちはそのバイトが好きだった。

バイト期間は8月1日から18日まで…。

あらかじめ休みを取っていた日以外休むつもりはなかった。

やっちゃまったー…。

そう思ったのは他でもない。

この自分。

バイトが終わればNの寮に夜に遊びに行っていたうちが甘かった。

その日のうちに帰ればなんの問題もないと思っていた。

Nの寮に行ってから気が付いたら寝ていたようで、
目を覚ませば、

バイトは朝9時からなのに8時過ぎ。

甘過ぎる自分にイラついていた。

その日のうちに帰れず緊急休暇をもらった日が2回。

当たり前のように親からはその度に罵倒のメール。

自分が悪いんだからいろいろ言われても無理もないと思ってはいたが、いざあーだこーだ言われるとムカついて反抗的な態度を取ってしまう。

何歳になっても反抗期ってあるんだなと思った。

そんな情けない自分を戒めるつもりで残業もした。

お泊まりしちゃって休みもなかったから、

社会からの信用を取り戻そうとも必死だった。

だから第2の戒めとして、

Nとは約束した日以外会わない事にしようと言った。

Nも、

うちの決めた事なら文句は言わないよ、
と言ってくれた。

だが無理だった。

ある日の夜、
急激に会いたくなくなってしまいその翌朝、
その日の夜に会う約束をしていたにも関わらず会いに来てもらった
のだ。

その会った日の夜は、
予想通りの残業だった。

何時に帰れるかわからない状況の下、
その日Nと会う約束をしていたにも関わらずなかなか帰れなかった
から、
ああ…今日は会つの無理か…とかそういうネガティブな事しか考え
られず作業しながら泣き出しそうになった。

他の部署からヘルパーとして来たバイトの人がペチャクチャ話して
いるのにもイラつきながら、
早く終わらせたいがために独りで黙々と作業をした。

バイトの作業時間が朝9時から夕方5時までなのに、その日はプラス3時間の8時まで頑張った。

実働時間10時間。

うちが作業していた部署の担当の人が、

「7時か7時半に終わらせるつもりだから、それまでにキリ付けてね」

と言っていたから、
急げばてつきりその時間に終わると思っていた。

無理だった。

死ぬかと思った。

いや、

むしろ半死。

精神的にはスタボロ。

それでもバイト終わりに来ているNからのメールにはかなり癒されていた。

その日の疲れその物が吹っ飛ぶほどの勢いで癒されていた。

不覚ながらも、
ニヤニヤしながら自転車こいで帰っていた。

うち今かなり気持ち悪いなと自分で思っていた。

そんなこんなを繰り返しながら、
うちの夏の短期バイトは終了した。

不安とリベンジ

夏にやったバイトの休みは緊急休暇以外は3回だけだった。

- 1 番最初の休みは高校時代の友達と映画のカーズ2を観に行き、
- 2 番目はお盆でお墓参りに行った。

ラストはNとうちの友達とまた映画で、
今度はハリーポッターを観に行った。

うちは最初すごく迷っていた。

なぜなら、

うちとNは普通に話すからいいものの、
友達は人見知りで大変しいから独りになっちゃってハブられたとか
来なきゃよかったかと思うんじゃないかと思ったから。

でもそんな事思わせようとは金輪際思っていなかった。

そんな事言ったらうちが無情な奴に思えるかもしれないが、
そう思うにはちゃんと理由がある。

友達と遊ぶ事になった時、

その仔は映画観に行きたいと言いだした。

コクリコ坂かハリポッターが観たかったらしいので、

そのどっちがいいかと迷っていたようなのでうちが観たい方観よう
と言ったら、

後者が観たいからとそっちを観る事にした。

うちはその時Nと一緒にいたので、

その時に友達とハリポタ観に行くと言ったらNも観に行きたいとの
事笑

しかも2回目笑

1回目も一緒に観に行った。

しかも台風が来ていた日ww

その話は置いておくとして、

うちは友達に彼氏も連れて行っていいかと聞いた。

友達はいいいよと言ってくれたけど、

念のために気まづくならない？

大丈夫？

と聞いてみた。

するとその友達はいいい仔で、

自分が2人の雰囲気を崩してしまうんじゃないかと心配してくれた。

うちは大丈夫だよと言った。

だってそんな雰囲気になったって現に崩しまくってたし笑

当日、

集場所はうちの地元の駅だった。

駅の改札口は北と南に分かれていて、
友達を見つけるのに結構手間取っていた。

やっと見つけた時はホッとした。

その時のNはといえば、

うちの気のせいかもしれないが、
ガラにもなく少しだけぎこちなさそうだった。

多分、

3人の中でNが1番年下だから。

ちなみに友達が1番上で二十歳。

それからうちらは話しながら映画館に向かった。

話したと言ってもうちとNだけが話していて友達はあまり話して
いなかった。

果たして人見知りだからなのか気を遣ってなのか…その真意は未だ
にわかっていない。

うちはつくづくガキなのか、
はたまたただの日々寝不足だけなのか、
ハリポタは8割方寝ていてあまり観ていなかった。

これは今に始まった話ではない。

実は1回目に観に行った時も大体寝ていた。

本当は高校時代の友達と観に行った映画も大体寝ていた。

ごめんなさい m (((m

最後に目を覚ました時はもう終わりがけだった。

映画を観終えてNからの一言。

「もうお前は映画には誘わない!」

やべWWW

まあ2回行って2回とも寝ちゃったら普通そつなるよなWWW

映画館を出、

昼ご飯がまだだったうちらはサイゼリヤに入る事にした。

Nと友達はハリポタの話をしていたが、
上映中寝ていて全然覚えていない。うちは話に全くついていけない。

ついていけなくて特別困ったわけでもないが、
それでも自分の彼氏が目の前で他の仔と好きなものが一緒で、
しかもその内容を話しているなんて、
あまり面白くない話だ。

昼ご飯も食べ終え、
友達もこの後用事があるとの事なので、
すぐに帰る事にした。

うちは地元だったから別に歩いて帰る事もできたけど、
でも少しでもNといたかったから一緒に帰りたいかった。

でもなぜか素直になれなかった。

この時本当は寂しかった。

少しでも一緒にいたい…けど別れた後が辛くなるだけ…。

でもそれとは裏腹に早く2人きりになりたい。

キスしてほしい。

けどNは口内炎ができたから無理だと言っ。

「来てくれんの？」

と聞いてくるNに背を向けて独り帰ろうとしたうちは後ろを振り向
かなかった。

少し歩いていると誰かに肩を掴まれた。

その誰かとはNだった。

追いかけられた事をきっかけに、
よりいっそう一緒に帰りたくなっただちは一緒に帰る事にした。

改札口を通過してから友達とうちらは乗る電車が違うので、
お互いの電車が来るまで少し待った。

先に電車が来たのはうちらだった。

だからそれに乗ろうとしたらNが、
電車来るまで待つてなくていいの？
と言ってきたからそれを聞いて待つ事にした。

普段のうちなら絶対待つが、
でもこの時正直そんな余裕はなかった。

友達の乗る電車も来てさあ帰ろうという時にまたNに次に、
手振らんの？
と言われた。

まあ友達なのに手を振らないのは変だなと思った。うちは振る事にした。

友達も振り返してくれた。

その直後にうちはショックを受けた。

自分から手を振らなそうなNが、
学校でもうちから振らなきゃし返してこないNが自ら振っているのだ。

ああ…そっか…。

うちはこの時初めてNと友達を会わせるんじゃないなかつたと思った。

所詮男なんてみんな同じなんだ…。

そう思った途端、

うちは電車でNの隣に座っている事自体が辛くなった。

違うところに座ろうと席を外してもNに腕を掴まれる。

離してといい年こきながら電車内で騒ぐうちを見たNは恥ずかしいからやめると言う。

その言葉に素直に従う気がこれっぽっちもなかったうちは、その手を離してくれたらやめると言ってNに手を離させた。

我が身が自由になったうちは、向かい合わせの少し離れたところに座った。

Nと目を合わせたくなかったから、全く関係ないところを見た。

降りる駅でこちらは一緒に降りた。

できるだけNを避けようと思ったが、
狭い駅内では完全には避けられない。

Nに捕まったらうちはメールを送ったんだけどと言われ携帯を開いた。

メール1件

内容は、

冗談だよ！
来いよ！

だった。

…冗談？
なにが…？

うちは正直言ってる事がわからなかった。

相変わらずNと目を合わせようとしないうちを見たNが、
帰る時にキスしなかった事なんてあったか？
と聞いてきた。

少し前までの回想を巡らしてもそんな事正直思い出せなかったけど、
でもキスしなかった日がなかった事を知っていたうちは首を横に振
った。

N曰く、

口内炎ができたと言うのは嘘らしい。

正直え？と思った。

メールで言っていた“冗談”ってこの事なのかと思った。

それでもキスしてもらえるならなんでもよかった。

降りた駅からまた乗るために電車を待ってる間、
うちとNはキスした。

しばらくして乗る予定の電車が来たからそれに乗った。

その乗っている電車の中で、
うちはなぜだかわからないが、
Nの事が本当に好きなのかどうかわからなくなっていた。

どういう経緯でその気持ちが伝わってしまったかは忘れたけど、
でもNはうちよりも恋愛経験豊富でそこからわかった事なのか、
どうやら1ヶ月に1回は好きかどうかなくなる時期があるらしい。

それでもNは、
うちの気持ちを壊したくないと言って無理強いしようとはしなかった。

それどころか元カノの話をしてくれた。

その時にうちはずっと気になっていた、
何人と付き合ってきたのかを聞いてみた。

いろいろ聞いているうちに、
Nはこれだけは絶対言えるという事があったのでうちはそれを聞いてみた。

それは、

「俺とは別れない方がいいよ。」

との事。

なんでかと聞けば、
どうやら別れたら気まづくなり、
しかもNは別れた彼女とは一言も話さなくなるらしい。

うちもNよりは少ないものの、

少しは男の人と付き合ってきた。

それは近距離恋愛だったり遠距離恋愛だったりいろいろだった。

それでも別れたら気まずくなるという感覚がいまいちわからなかった。うちは、
そうなんだと言う事しかできなかった。

そうは思いはしたものの、
うちにはNとは別れようという意思は一切なかった。

それどころかその時のうちには、
別にその場の雰囲気にならされてたからとかではなくて、
単に、
ただ純粹にNの事がもっと好きになっていた。

こんな事を思うのはまだ実際早いのかもしいないが、
時が経つので早いなあと思った。

この時のうちは、
ガトーショコラを作っていた。

以前までのうちなら全くなんの関係のない日でも普通にケーキを作
っていたが、
最近のうちは違う。

そう、

Nと付き合ってもうすぐで2ヶ月記念のためのケーキを作っていた

のだ。

ガトーショコラは1ヶ月記念日に作ったレアチーズケーキとは違って何回も作っていたからなんの失敗もなく作った。

とは言ってみたものの、

Nに渡すために完成させたケーキは、
実際2回目で作ったものだった。

1回目は単にめんどくさがりなうちの性格がもたらした失敗だ。

その原因は、

クッキングシートとラップを間違えて買ってしまったのだ。

クッキングシートとは生地を型に流す前に敷くのだが、
その肝心なものを忘れてしまったうちは、
別にそれがなくてもやり切る方法を知っていたのでなんとかそれで
やり過ごそうと頑張った。

が、
甘かった。

少し前に直ったオーブンで焼かれているガトーショコラの生地が型
から溢れているではないか／（＾Q＾）ノアチャー

あチャーとか言ってみるものの、

その失敗した光景を見た実際のうちは、
そんなにおちゃらけていなかった。

むしろすごくショックを受けて塞ぎ込んでいた。

もう一生ケーキなんか作るもんかと思うほど落ち込んでいた。

記念日にケーキがないとかマジごめん…

とは言つものの、
いつまでも落ち込んではいられない。

記念日にケーキないとかマジ有り得ねーと思つたうちは、
夕ご飯も食べずにリベンジした。

そしたら見事に無事に完成した(。 。)。 やつたね

それを見て一気にモチベーションが上がつたうちは、
その勢いでお預けにしていた夕ご飯を食べた。

めでたしめでたし。 +

2ヶ月記念と嫉妬(前書き)

ようやく最近の話になってきたので思い出すのが楽になってきました…？

作者19歳のクセに言葉のレパートリー少なすぎていろいろ勘違いをさせてしまう事もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたしますm()m

2ヶ月記念と嫉妬

記念日になると喧嘩してしまうのはなにかの悪循環なのかと疑問を抱いてしまうのはうちだけだろうか。

それともうちが単に感情的だからなのか。

事の発端はと言えばうちの意味のわからないわがままからだ。

記念日の少し前の日から、
その日に豊橋行くけど来るかとNから言われていた。

最近全然Nに会っていなかったうちは、
少しでも一緒にいたいからという事で一緒に行く事にした。

前日になっても何時にどこで待ち合わせするかとなにも言われてい
ないうちは何回かNにそれを聞いた。

けど時間はわからずじまい…。

当日、
豊橋に行く話はなくなった。

多分、
なにかいろいろあったのだろう。

だから、

必然的にNと会うのは夜からという事になった。

豊橋行く行かないより、

うちは朝から会えないという事に落胆していた。

夜からしか会えない理由は、

Nの新聞配達の仕事のうちの1つ、

集金。

親に朝から会わずに夜から会う事になったと言ったうちは、
昼からは無理なのかと言われた。

うちはその時は、

昼から集金出るらしいから無理だと言った。

けど、
そう言われてみたら昼から会いたくなってしまうたうちは、
Nにそう聞いてみた。

『集金あるから』

思った通りの返事。

せっかくの記念日なのに会つのが夜からで、
最近全然会っていなかった寂しさが一気に込み上げてきたうちは、
思ってもいない事を言ってしまった。

『今週会わない事にしよ。』

それを聞いたNには疑問しか抱かせなかった。

Nから電話が掛かってきても出る気がしなかった。

出たって言われる事はわかっている。

うちは3回目の電話で、

これが初の目立った口喧嘩になる事も知らずに出た。

開口一番で言われた事は予想通り。

うちは集金件数が多い事をNから聞いていたので、
それを会わない理由にした。

でもNはもうすでに大体終わらせていると言っ。

それに、

「俺なんのために夜遅くまで頑張ってると思ってんの。」

と言われた。

そんな言われなくてもわかってるよと思ったうちの口からは出任せばかりが出る。

「そんなん自分の勝手にしょ。」

そこからはうちは会わないの一点張りだった。

本当は会いたいのになぜか素直に言えない自分がもどかしかった。

でもNに説得されていくうちに、
本音を言った。

悔しかったけど、
すごく気が楽になった。

その後はなぜか少し逸れた話に進んでいった。

そのうちに何時に会いに行くかという話になった。

集合時間は13時。

その時間帯にやっと会える…。

時間も近くなつた頃、
うちは薬局を出た。

だが13時を過ぎてもNが来る気配は全くなかった。

だからうちは、
滅多に自分からはしない電話をした。

が、
Nは出なかった。

やっとNから連絡が来たのは電話から数十分が経った頃。

『14時過ぎに近く通るから。』

うちはそのメールを見た時、

え？

もうすでに14時回ってますけど。

と思った。

だから15時の間違いかとも思った。

けど、

やっと会える事が嬉しすぎて楽しみだった。うちはその場でずっと待っていた。

予想範囲内の15時を過ぎてもNは現れなかった。

でもうちはNに会いたいがためにずっと待っていた。

この後にNから掛かってきた電話で、

何時間も待ってた事がバカバカしく思える事も知らずに…。

うちが定位置で待ち始めてから数時間経っていた頃、
Nから電話が掛かってきた。

散々待っていたからすぐに出た。

でもその後のNの発言に、

うちは一気にムカついた。

「ごめん、寝てた…。」

は？
寝てた？

あっつい中ずっと待っていた事自体がバカバカしくなっ
たりたくなかった。たうちは帰

しかもその後のNの発言に我慢できなかった。

「夜また来れる？」

なに言っとんのロイツ。

そう思ったうちは帰ると言った。

Nは帰るなよと言っが、
うちにはちゃんと妥当性のある言い返す言葉がある。

「うち一体なんのために早くに来て何時間も待ってたと思ったんの。」

それを聞いたNは謝ってくれた。

でもうちは許す気になれなかった。

だからバカみたいと言って勝手に電話を切った。

その直後に数回Nから電話が掛かってきた。

でもうちは全部出なかった。

掛かってくる電話が鬱陶しくなって、
携帯の電源も落とした。

しばらくして電源を入れたら、
1件メールが来ていた。

送り主はNだった。

内容は絵文字なしで

『10分後に通るから待ってて。』

だった。

メールが来てから10分後、
Nは来た。

夕刊の時間帯だったから、
Nはバイクに乗ってきた。

怒っているにも関わらず、
Nのバイクに乗る姿はいつ見てもかっこいい…。

でもそれ以上に怒っている感情が強かった。うちは、
Nがバイクから下りて近くに寄り添って来て謝ってくれてもうんと
しか言わなかった気がする。

用件だけ済ませたNはすぐに配達に出、
早くに終わらせ会いに来てくれた。

その後はNは集金に出たので、
うちも一緒に付いていった。

その時にはもういつまでも怒っているのがアホらしくなって、
一緒にいられる事自体が嬉しくなっていた。

長いようで短かった夏休みも終わって、
とうとういやな学校が始まった。

夏休み中よくNと会っていたうちは、
9月からどうやって接していこうねーとか他愛ない事を話していた。

実際学校が始まってみれば、
夏休み前とそんなに変わらなかった。

あえて変わった点を言えば、

Nと出会った当時に比べればうちはNから逃げなくなった。

2ヶ月と少しも一緒にいれば、

少しは免疫ができるのかなと思っただうちはまだまだなのか。

9月初めの授業だったし、

最初はゆっくり行こうという先生の意向もあって、

この日授業らしい授業はなかった。

ある授業ではUNOをやったりしていた。

それが飽きれば、

クラスの仔達と一緒にUNOでトランプタワーを作っていた。

その頃のNはと言えば、

9月中旬に控えている国家試験の補習を受けていた。

夏休み中にもその補習はあったが、

新聞配達の仕事などでなかなか行けなかったから、

いざ受けている姿を目にすると切羽詰まっているように見えた。

その国家試験まで後1週間、

Nにそれに向けて夏休み中ろくにできなかつた勉強をさせた方がいいだろうと思つたうちは、

夏休みに入る前はよく夜に会つていたがそれをやめて、試験が終わるまで夜は会わない事にしようと言つた。

Nも実際焦つていたらしいので、

その提案には反対してこなかつた。

最初は1週間くらいは楽勝だろうと思つていたうちだが、

3日目を過ぎると寂しくて夜に泣いたりもした。

たまらずNに泣きながら電話もした。

すると出ないと思っていたのに意外と出た。

N曰く、

寝ていたところを同期の寮生に電話だといって起こされたらしい。

電話に出ても相変わらず眠そうな声のNは、
自分の事よりうちの心配をしてくれた。

心配をしてくれたにも関わらず、

この時のうちはNの声を聞けたという安堵でいっぱいだった。

朝刊に響くといけないからという事で、
電話はすぐに切った。

登校時と下校時にはどっちかが休まない限り必ず会えるのに、
寝てしまえばすぐに朝は来るといふのに、
この時のうちはきつと精神的に追い込まれていたんだと思う。

どっちかが休まなければ、
という言葉通りにうちらは一緒に登下校をした。

その日の下校時、
異性経験が少ない人って本当に損をするなとつちは思った。

そう思った出来事はなんの前触れもなく起こった。

いつも通り話ながら帰っていると、
Nがうちの知らない女子にお疲れ〜と声を掛けていた。

その光景を見ればすぐに、
ああ同じコースの仔かとすぐにわかったし、
そんな事は日常茶飯事だから気にもならなかった。

けどつちはその後、
Nがその女子の名前を呼び捨てにしているのを聞いてしまった。

なんで
…

その後はずーっとその事しか頭になかった。

不安という気持ちもあったけど、
でもなにより彼女であるうち以外の女子に、
しかも下の名前を呼び捨てなんてしないでという嫉妬の気持ちの方が強かった。

うちの様子の異変に気付くのがうまいNは、
元気がないとかいろいろ気にしてくれていた気もするが、
うちはそんな事ないよと言う。

夕刊配達の間時間も近くなってNがいなくなった。うちは寮から少し離れているところで待っていた。

その間中もさっきの事が頭から離れなかった。

待っている途中で帰りたくなって本気で帰ろうかとも思った。

でもどうせ帰ったって同じ事。

この耳で聞いたという事実は何一つ変わらない。

うちもつと寛大にならなきゃなとも思った。

うちの方が年上なんだからとかいうプライドもあったのかな…。

夏休み前まで普通に夜に会っていたものが、
最近はその時間帯にしょっちゅう会えなくなってしまった。

本家の店長の意向で夜の外出が少し難しくなったらしい。

でもこの日は少しの間だけだったが、
会えるようにしてくれた。

久しぶりに2人きりになれたから嬉しい…というより、
少々複雑な気持ちだった。

原因はやはり、

下校時にNがうち以外の女子を下の名前で呼び捨てにしていた事。

それだけが引つ掛かってなかなか素直にNを受け入れられなかった
気がする。

そんなうちの様子を見てNは心配してくれたが、
正直こんなちやっちい事、
しかも18年も生きていれば女の1人や2人友達がいて、
しかもその仔達の事名前で呼び捨てにくらいすんだろと思っただから
…うちの事めんどくさい女だと思われなくなかったから、
元気がなかった理由なんて言えなかった。

でもうちにはたまたまらず言ってしまった。

でもう関係…？

そんな事が頭を駆け巡っていた。

するとその理由は、
うちが全く以て想像していなかったものだった。

N曰く、
学科の担任の、

「同じクラスなのにさん付けなんてよそよそしいから。」
と、いつ意向らしい。

それを聞いたうちは納得した。

男の事が未だに信じられなくても、
それでもあの学科の担任なら有り得るなと瞬時に思った。

「不安だった？」

どっちかという嫉妬の気持ちが強かったうちは、
少しでも不安という感情があったから頷いた。

するとNは、

うちが聞いて一番安心する事を言ってくれた。

「俺はお前しか見えてないから。」

すごく嬉しかった。

近距離恋愛をしたのは中1以来だったけど、
でもこっついののは初めてだったからすごく安心した。

その後、Nに裏切ったなら殺すと言われ、その言葉にさえ安心した。

さっきも言ったけど、
うちは未だに男の事は信用できない。

けど、
Nはうちが今までに付き合ってきた人とはなにか違う気がした。

国家試験と3連休（前書き）

今回のお話は、

つい最近あった3連休についてです。

ほんつとつに最近の話です？

国家試験と3連休

9月11日国家試験当日、

受験時間は昼からなのにNからはなんの音沙汰もなし。

勉強しているから、

とも考えられるが寝ているという見解も否めない。

試験が終わって数時間後、
Nから連絡が来た。

音沙汰のなかった理由は、
やはり寝ていたから。

それを聞いたうちは試験に間に合ったのか心配になった。

聞くかどうかやら間に合ったらしい。

N日く、

同期の寮生に起こしてもらったとか。

電話すればよかった…。

間に合ったのはよかったけど、
その時のうちの内心はそうだった。

思ったのにそうしなかった自分にイラついた。

Nと出会った時から元々が利かなくてダメなうちだったが、
最近になってますます気が利かなくなった。

こんなんじゃない、
いつかは愛想を尽かされる。

将来を約束した仲なのに…。

え？

将来を約束した仲？

はい、

そうですそのままです。

うちらNの卒業を待つて結婚する事になりました。

＼はい祝福ありがとうございます／

…不思議なものだと思った。

結婚はしない一生独身貴族でいる、
ましてや男が信用できない。

なのにこうもしょっちゅう一緒にいると、
離れられなくなってずっと一緒にいたくなって、
しまいには結婚にまで発展しちゃうんだね…。

怖いわー。

じゃなくて話を戻します。

いろんな後悔をした後にNから電話が来た。

その電話でNは、

まだ結果もわからないのに受かったわと相変わらず自信满满。

何回も言うつようだけど、

結果もまだわからないのにそれを聞いたうちは嬉しくなった。

解答速報は19時からと聞いたうちは早っ!!とびっくりした。

さすが国家試験と言っているのか否か…。

Nはめちゃくちゃそわそわしている様子ww

その時の電話は解答速報の時間が近かったので切り、
またの連絡を待った。

19時過ぎ、

Nから電話が来た。

出るとさっきとは打って変わってテンションが低い。

聞くと落ちたとか…。

国家試験を受けた事もなければ落ちた事もない。

でも検定を落ちた経験があつてそのなんとも言えない残念な気持ちを知っていたうちは一緒に残念な気持ちになつた。

Nは相当残念がっていた。

うちはその日の夜、
親と外食をした。

外食の最中にまたNから電話が掛かってきた。

その電話でうちは意外な事実を聞いた。

聞くとその19時に出た答えはあの、
本気になっ たら〇〇 の学校の現役生徒が出した答えらしい。

去年とかもそうだったらしい。

しかもNから見たら先輩うちから見たら同期の生徒が、
その学校の解答はその人が試験を受けた時、
12個の解答ミスがあっ たらしい。

それを聞いたうちは、
じゃあまだ望みはあるんじゃない!!と思った。

でも実際合否結果がわかるのは約1ヶ月後。

Nは言わずもがな不安そう。

外食も終えうちと親は家に帰ってきた。

家に帰ったら勉強をするとあらかじめ聞いていた親は気を利かせてか1時間の長い買い物に出た。

でもうちは正直勉強する気なんて金輪際なかった。

だから電話を切ってから相変わらずNとメールをしていたうちは、Nに早く会いたいと言った。

するとNは、

今日夜漫喫行くから一緒に来るかと言ってきた。

もちろん行くと言った。

しかもその日のうちに帰る気は一切なかった。

明日の学校に間に合えば問題ないと思っていた。

が、
次の日。

Nは学校に行くのをめんどくさがっている。

うちだって正直きたくなかった。

だから行くこととした。

でもNはええく行くのどこ不満な様子。

だつて行かなきゃうちの学科のクラス、
今遅刻欠席とかで先生にいろいろ言われたりして雰囲気悪いし…。

でもしばらく考えた結果、
いつも一緒にいる友達には申し訳ないが、
うちは学校をずる休みする事にした。

でも内心は嬉しかった。

Nとは学科が違うから校内ではそんなに会えないけど、
この日ばかりはNの夕刊配達の間までは一緒にいられるから。

その日の週、
土日月と3連休が入っていたのでうちとNは土曜日の夜から3日間
すべてを一緒に過ごした。

この3連休はいろんな事があつた連休だった。

まず初日はうちは進学を考えている学校に見学会へ行つた。

その日バス地下鉄共通券を持っていたので、
帰りは無駄にバスを乗り継いだ。

だからその学校から帰るのに通常1時間も掛からないのにその時は1時間以上掛かった。

家に着いてからはその日に買ったマンガを読んだりしてから家を出、Nに会った。

その日はNと自転車旅行をした。

一旦寮に戻っていいかと言われたので一緒に自転車で行った。

そこからはいろいろぐるぐる回ってマックに入った。

そこでうちは信じられない事実に気が付いた。

「あれ…？
ない…。」

かばんの中身を何度も何度もまさぐる。

「ない…。」

けどやっぱりなかった。

探すにしてもこの日行動範囲の広がったうちは探しようにも見当が付かない。

でもうちは過ぎた事は簡単に忘れてたりどうでもよくなったりする夕子だから、
またバイトして稼げばいいやと軽い考えでいた。

財布の事はもう諦め、
その日の夜うちとNは自転車をその辺に放置して、
地下鉄に乗って漫喫に行った。

考えがコロコロ変わったり行動力があり過ぎる人って本当に怖いと思っただのはNと出会ってからだとは言うまでもない。

次の日、

Nは松本（長野）に行こうと言い出した。

3連休に入る前から行きたいと言っていた気はするが、でもまさか本当に行くとは思ってもみなかった。

松本に着いてからは松本城に行こうとしたが、時間の関係上取り止めになった。

そのまま素直に帰る事になった。

その電車の中で対立する事も知らずに。

うちらはゆっくり帰る事にし、

6時間掛かる各駅停車の電車に乗った。

ある駅を越えたところで車両移動しようという事になり移動した。

その時うちは、
普段学校でイチャイチャできないからしたくてしょうがなかった。

が、
移動した後Nはすぐに運転席近くの窓に行ってしまった。

うちの事なんてどうでもいいんだ…。

そう思ったうちはその窓には行かず、
勝手に席に付いた。

しばらくしてNが向かい側の席に来た。

Nは隣に来たらと言うがうちは行かなかった。

なぜか行く気がしなかった。

その原因はすぐにわかった。

月1ペースで来ると聞いた、

あれだ。

そう、

うちはNには言わなかったが、

この時まさにNの事が本当に好きかどうか分からなくなっていた。

何駅か通り過ぎるまでうちは席に寝そべっていた。

その後によっとNの隣に行った。

でもイヤイヤする気にはなれなくてずっとNに背を向けて座っていた。

いつまでそうしてるのとか、
この時間がもつたいないとかいろいろ言われたが、
うちからしたらそんな事どうでもよかった。

目障りかと聞かれたから正直にうん目障りとも言った。

こんなにわがままになっちゃ、
いくらNでも愛想を尽かすだろうとも思った。

独りになりたいかとも聞かれ頷いたうちを見たNは席を外してくれた。
た。

しばらく独りになっているうちにNが戻ってきた。

理由は車内が混み始めたから。

Nはうちを落ち着かせるために寝たらと提案してきた。

その提案に乗ったうちは少し寝た。

少し経って起きたうちは、

Nに落ち着いたかと聞かれ頷いた。

そこからはNとふざけ合っていた。

やっと地元に着いてこちらは次の日も会う事になった。

朝早くどこどこ集合ねーとか言われたが、朝起きれないより親が外出を許してくれるかどうか心配だった。

まあ例え許してくれなくても無視する気満々だったが笑

するとNがある事を提案してきた。

「お金渡すからカラオケにおる？」

うちは別にそれでもよかったが、
でも財布落として今日の分全額払ってもらってその上カラオケ代を
出してもらうなんていい加減悪い気がした。

そうは思うものうちはNに、
自分がそれでいいならいいよと言った。

するとNはお金をくれ、

5時にはカラオケから出るようにとだけ言って寮に帰っていった。

悪い気はしながらうちは歌った。

途中で電話やらメールが来ていた。

そのすべてはNからだった。

もう少ししたら着いたよと連絡を入れるつもりだったが、
すぐにしなかつたせいでNにいらぬ心配をさせた。

わがままな上にいらぬ心配をさせるなんて、
うちはとことんダメな彼女だ。

そんなこんなを思いながら歌っていると、
やけに同じ人がうちのいるルームの前をうるちよろしている事に気

が付いた。

たまに嘲笑のような声も聞こえたが、
中高とそんな声を聞いていたうちはそんなもの気にはしていなかった。

ただこの後に起こった出来事には本当に驚いた。

うちのいたルームの前をうろちよろし続けていた人が、
ドアノブに手を掛けて入ってこようとしたのだ。

その時性別はわからなかったが、
女の勘からかすぐに男だと思った。

実際にまで入ってこなかったが、
もし入ってこられたら間違いないと暴力されると思った。

すごく怖くなって、
朝刊配達中だから返事は来ないとわかっていてもうちはNに助けて
とメールを送った。

その後は特になにもなかったし、
やっと時間になって出たうちは5時までまだ30分も時間があった
から近くのコンビニに入ろうとした。

すると背後から知らないおじさんに声を掛けられた。

今暇？

とか、

僕あの車乗ってるんだけどお

とか明らかにナンパまがいな事を言われた。

だからうちは嘘で今急いでるのでと言って抜けた。

まだこの時の声掛けなんて単純なものだった。

高3の時なんかもつとしつこい人がいた。

まあその話は置いておくとして、
Nには早朝に会った。

Nは朝ご飯を食べたばかりなのに空腹いたと言ってすき家行くと
か言い出した。

店内で今日どうするかを考えていた。

いろいろ考えた結果、
昨日行った松本に行く事になった。

は？

また行くの？

とびっくりした。

松本に到着してからは周遊バスに乗って昨日行けなかった松本城や諏訪湖に行った。

見終わればいろいろ立ち寄りしたりしてから、
次の日は学校だったしそれにNには朝刊配達があるから早めに帰る
事にした。

帰りの電車内、
うちらはまさかなハプニングに見舞われた。

その日は台風がまだまだではあったが徐々に近付いていた。

そう、

その台風の影響で大雨が降り、
うちの乗る電車が運転見合わせになったのだ。

Nはめちゃくちゃ不安そうにしていたが、
うちは不謹慎だとわかっていたが結構面白がっていた。

その電車が動き出したのは見合わせになってから数時間後だった。

乗り換えのある駅で降りたうちらは電車を乗り換えてそれで帰った。

その電車でNはすごく眠そうだった。

そりゃまさかの事態に陥ったんだからそうなってもおかしくはなかった。

だからうちはNを寝かせる気でいた。

けど無理だった。

Nではなくうちが寝てしまった。

有り得ねーと思った。

なぜなら、

実はこの日朝から電車内で大半寝ていたからだ。

この時ばかりは寝かせるべきだと思った。

なのに自分が寝てしまった。

そのせいでNは寝れなかった。

だって2人共寝ちゃったら乗り過ぎしかねないし…。

やっと地元に着いて地下鉄を待っている時、
Nにこんな事を言われた。

「今日2時半に起こして。」

うちはこの時さすがに眠くなかったから起こせるだろうと思った。

だがこの後のNの発言に、
すごく責任を感じてしまった。

「お前あんなけ寝てたんだから起こせるよな？」

それなりに適当に生きてきたうちだが、
こればかりはそうはいかない気がした。

起こせなかったらどうなる…？

今度こそ愛想尽かされちゃう…？

車内でもずっとその事が頭から離れなかった。

だからうちは早くNから離れて帰りたいかった。

乗り換えの駅ですぐ降りた。

すると他にも乗り換えの駅はあるのに、
Nもなぜかうちと同じところで降りた。

うちは1人だと絶対乗り過ごすからかなと思った。

乗り換えのホームに着いたら、
先にうちの乗る電車が来ていた。

正直それに乗ろうかと思ったけどやめた。

だからうちはNの乗る電車が来るのを待った。

その電車はすぐに来た。

うちはNがその電車に乗るのを見送らずに違うところへ移動した。

その電車の扉が閉まってからうちは見送らなかった事を後悔した。

後ろを振り向いてもNがいない。

電車が動き出して、
Nを探してもいない。

後悔ばかりして泣きそうになった。

だから、

かなり沈んだ気持ちで家に帰った。

家に着いてからだったか、

うちはNに遠出はもうしない事にしないかとメールした。

その場の雰囲気ではなぜか、

後明日から友達と帰るからともメールした。

するとNから電話が掛かってきた。

鬱陶しかったから電話には出なかった。

それから何回か掛かってきたが、
それにも出なかった。

やっと出たのは3回目の電話だった。

その電話でまずなんで俺と一緒に帰らないのかと聞かれた。

うちはその時思っていた事を正直に言った。

その後になぜ遠出はもつしない事にするのかとも聞かれた。

その理由も正直に言った。

するとNも遠出は控えようかと考えているらしい。

だから遠出をするのは気晴らしにとって事になった。

今週にはまた次は金土日と3連休があったので、
うちはNに金曜日はどうするかと聞かれた。

うちはこの時いろんな事が面倒だと感じていたので会わないと言っ
た。

大丈夫かなあとNは心配してくれたが、
うちは大丈夫だよと言った。

するとNは寂しそうだった。

でもNはうちの決めた事にはあーだこーだ言っ
てこない。

だから結局会わない事になった。

国家試験と3連休（後書き）

最近になってつくづく思う事はと言えば、なんだか喧嘩ばかりして
るような気がします？

そりゃ長い事いたりしょっちゅう一緒にいたりすれば対立する事だ
つてあるし、それでも喧嘩する事はいい事だと思えます。

なぜなら言いたい事言い合える人ってなかなか見つからないと思う
からです？

前書きにも書きましたが、今回書かせていただいたお話はほんつと
うに最近の事です。

なので次回更新はいつの話になるかわかりませんが、それでも読ん
でくださっている読者様には気長に待っていただけると光栄です。

お詫びとお知らせの言葉を添えて

9月って台風がたくさん来る月とかって聞いたのはいつの日だったか、

その日まさに台風上陸日だったからうちとNの通う学校は休校日となった。

だからうちは朝は早めに起きたが、
布団を畳んでからしまわずにその上にゴロンと寝転がって新しい携帯小説を投稿するために話を考えていた。

題名は

「私の片想い」

だよ!!

まだ未完成だけどよかったら読んでみてね

今はそんな事はどうでもいいとして、
ふと時計を見たら11時を回っていて、
いくら遅くても学校のない日は10時近くには布団から出ていたう
ちはその畳である布団を押し入れにしまつて、
もうすでに朝ご飯は済ましていたから先に部屋着に着替え顔を洗っ
た。

なんだかわからないが、
この日はやけに電話が掛かってきた気がする。

大半はNからで残りは今の学校の友達。

電話していてもしなくてもその後は大体決まってNとメールしていた。

そんなある時、

Nから返事が来なくなった。

この時は仕事疲れで寝ちゃってるのかと思っていたからそうは気にしなかったものの、

でもあまりの返事の来なさに寂しくて耐えられなかった。うちは返事が返ってきていないにも関わらず1時間おきに2通送った。

241

1通目は寂しいとかって送って、

2通目は今の自分でもなんでこんな事送ったのかよくわからないが、明日独りで学校行くと送った。

その数時間後くらいにNからメールが来た。

するとその文面には今まで仕事だったと書いてあった。

その下には明日独りで学校行くからに対する返事が一言だけ

は？

と書いてあった。

まあそう思うのも無理ないだろうと思った。

つい昨日やっぱり金曜日会いたいとNに言ったばかりなのに、
うちはその返事にはやっぱり金曜日いいやと言った。

するとNから電話が掛かってきた。

こういう雰囲気になった時の電話には決まって1、2回掛かってきてもうちは出ない。

4回目に掛かってきたものでやっと出たうちはNに電話に出る気はあったのかと聞かれた。

大体の事はなんでも遠回しに言いつちは出る気なかったら出てないよと言った。

じゃあなんですぐに出なかったのかと聞かれたうちは、この時勉強していたので取り込み中だったと言った。

実際は出る気なんかなかった。

でもそんな事言ったら余計面倒な事になるとわかっていたからそんな事は言わなかった。

その話が終わればNは仕事で寂しい思いさせた事に対して謝ってくれた。

その後にはやはり独りで学校行く事に対しての話。

なんでと聞かれて自分から理由を言った覚えはないが、でもNがいつもより朝時間早いだろうし大変なのはわかると言ってくれた。

それは否めなかったうちはそれを理由にした。

それを聞くとNはわかってくれた。

どんな口喧嘩になろうと、
Nから何回か電話が掛かってきても必ず出るうちはその時Nに褒められた。

このタイミングで褒めるのかと少々びっくりしたうちは、
その理由を知って納得した。

Nの元カノ達は、
喧嘩してNが電話しても無視して出なかったらしい。

そうになるとNは次の日その仔と一言も口を聞かなくなるとか。

出たくなる気持ちはわからなくはないが、

でも話し合っただけで言いたい事を言わなきゃスッキリしないとわかって
いるうちは初めのうちは決まってる出ないが数回掛かってきたものに
は必ず出る。

その後Nは仕事の悩みについて話してくれた。

その事を同じクラスの仔にも言ったらしいがその仔はそんな事俺に
言われても奨学生じゃないからと言ってはね除けたらしい。

母親に言っても全く人の話聞いていないと言って頼らない事にして
いるらしい。

だからNはうちだけにこつこつ話をしてくれているらしい。

頼られている感じがして嬉しいけど、
実際うちにも大変さはよくわからない。

でも話を聞いてあげる事くらいはできる。

夏休みに入る前のある授業で、
どういう人が好かれるか3つの事を教えてくれた授業があった。

そういう人はまず顔がいい。

これはうちには無理。

次は話が面白い人。

これもうちには絶対無理。

そして3つ目、
人の話を聞く人。

最初の2つが無理なうちにはこれしかないと思ったから、
というか人の話だけでも聞かないと自分の周りから誰もいなくなる
ような気がして怖かったから、
話だけでも聞くようにしている。

その後は喧嘩した後はいつものようにふざけ合っていた。

その後うちは、
さっきまで独りで学校行くと言っていたのにすごく一緒に行きたく
なったので行きたいと行く事になった。

途中失礼します、
作者の月見です。

突然ですが、

誠に勝手ながらこの初の年下を今回限りで終わらせたいと思います。

決してNと別れたからとかではなく、

昨日書き始めた作者の日常という小説を書いていて気付いたのですが、

色恋沙汰だけを書いていくのは難しいという事になり、

それを作者の日常と合併して書いていこうという事になりました。

誠に勝手ながら、

今までこの本編を読んでくださった読者様にはもし続きを読む気があれば作者の日常の方も読んで頂けたら光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8945v/>

初の年下

2011年9月29日23時09分発行